様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月１１日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2011
課題番号：21792202
研究課題名（和文）　慢性呼吸器疾患患者のエンド・オブ・ライフ・ケアの臨床知

研究課題名（英文）　Practical wisdom regarding end-of-life care for patients with chronic respiratory disease

研究代表者
高橋　良幸（TAKAHASHI　YOSHIYUKI）
千葉大学・大学院看護学研究科・助教
研究者番号：30400815

研究成果の概要（和文）：
本研究はエンド・オブ・ライフの時期にある慢性呼吸器疾患患者のニーズを看護師がどのように捉え、そして患者家族とどのような相互作用を起こしながら実践を行っているのかその臨床知を明らかにすることである。慢性呼吸器疾患のケア経験を 5-13 年の経験をもつ 10 名の女性看護師にインタビューを行い、質的帰納的に分析を行った。患者との相互作用を通して、看護師は終末期おいて不確かな状態にある患者の潜在的ニーズを引き出し、最後の最後にありたい姿を見出しつつ、それらを成就させていっていることが明らかになった。今後これら相互作用を活用し相互作用を含む実践評価や看護モデルがが期待される。

研究成果の概要（英文）：
The aim of this study was to identify nurses' perspectives on the needs of patients with chronic respiratory disease (CRD) and the interaction between nurses and patients or family members. We interviewed 10 female nurses with 5-13 years of clinical experience with CRD. Interview data were subjected to qualitative and inductive analyses. The results indicated that the nurses try to identify the potential needs of patients who are uncertain about the end of their life, make them aware of what they want to be in the end-of-life period, and satisfy their last wishes. In the future, these findings are expected to facilitate the creation of an assessment tool for evaluating our interaction and the nursing care model.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成２１年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
平成２２年度	３００，０００	９０，０００	３９０，０００
平成２３年度	１００，０００	３０，０００	１３０，０００
年度			
年度			
総　計	９００，０００	２７０，０００	１，１７０，０００

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：臨床知、エンド・オブ・ライフ・ケア、慢性呼吸器疾患

１．研究開始当初の背景

近年、がん疾患患者へのターミナルケアへの関心がすすみ、整備が整いつつあるが、慢性疾患患者の終末期あるいは終末期に向か

うまで（ここではこの時期をエンド・オブ・ライフ期とする）のケアについて、いまだ知識としてまとめられていない。慢性疾患患者は、がん疾患患者とは異なり、長い経過の中でさまざまなニーズを持ち、セルフケアをしていかなくてはいけないという点から、看護は患者との相互作用を通じながら、また個別性を持って実践を行っていると考えられる。そのため看護ケアは非常に評価しづらく、ケアの知識は、臨床看護師の臨床実践そのものの中に蓄えられ、今だ詳しく調査されていない。その主な理由は、終末期ケアは身体状況や経過がそれぞれ異なり個別的なもので普遍的な知識として統合されにくく、そしてエンド・オブ・ライフ・ケアの評価は患者からのフィードバックが少なく看護師と患者の相互作用の結果生まれるものとして考えられ、それを語る場のない看護師個々の経験内にとどまっていると考えられるからである。

本研究では、種々の慢性疾患の中でも徐々に身体状況が悪化し、入院・外来・長期療養施設・外来・訪問看護などさまざまな場でケアが提供され、さらに、呼吸機能の低下の進行によってさまざまな些細な日常動作もできなくなり喪失を体験してゆく特に慢性呼吸器疾患を取り上げ、その臨床の知を明らかにしようとするものである。

２．研究の目的

本研究では、慢性呼吸器疾患患者のエンド・オブ・ライフ期における看護師の臨床知を明らかにするため、以下の２点を明らかにする。

(1)研究１「エンド･オブ･ライフ期にある慢性呼吸器疾患患者は、緩徐に悪化するプロセスの中でどのようなニーズをもっていると看護師は捉えているのか」

(2)研究２「エンド・オブ・ライフ期の慢性呼吸器疾患患者へ、看護師はどのような患者・家族―看護師関係〔相互作用〕を結んでいるのか」

３．研究の方法

（１）研究対象者

研究１では、関東圏で慢性呼吸器疾患患者へのケアの実践が 5 年以上あり、病棟･外来･在宅酸素療法を提供する事業所に勤務する看護師およそ 4～5 施設計 10 名を対象とした。研究２では看護師の患者との相互作用を明らかにするため、研究１の対象者のうち病院に勤務する看護師のみを対象とした。

（２）データ収集方法

研究１および２ともに、研究対象者へインタビュー（一部グループインタビュー）を実施し、ケアの中で感じた患者のニーズ、および、どのような相互作用を生じさせながらケアを行っているかについて約 60 分の半構成的面接を行った。

（３）データ分析方法

得られた録音データは逐語録に起こし、それぞれの研究目的ごとに分析テーマを挙げ質的帰納的に分析を行った。

（４）倫理的配慮

千葉大学大学院看護学研究科の倫理審査委員会の承認を得て研究を行った。

４．研究成果

（１）対象者の概要

関東圏の慢性呼吸器疾患患者の診療する中核病院に勤務する看護師 7 名、および、在宅酸素療法機器を提供する事業所に勤務する看護師 4 名の計 11 名であった。施設数は、病院 3 施設、事業所 2 施設であった。病院勤務看護師の平均臨床経験年数は平均 20.5 年で、慢性呼吸器疾患患者へのケア経験年数は平均 9.8 年であり、全員が女性であった。7 名のうち認定看護師 3 名、呼吸療法認定士 2

名を含む。インタビューは個々に行い、平均インタビュー時間は平均 53.1 分であった。

在宅酸素療法機器を提供する事業所に勤務する看護師の臨床経験年数は、平均 16.3 年で、慢性呼吸器疾患患者へのケア経験年数は、平均 8.9 年であった。すべて女性であった。2 名ずつのグループインタビューを行った。平均インタビュー時間は平均 59 分であった。

（2）研究１の結果

分析の結果、慢性呼吸器疾患患者を病院でケアしている看護師が捉えている慢性呼吸器疾患患者のニーズは、患者は、身体的心理的苦痛からの解放を願い、いてほしい時には誰かが傍にいることを望み、日常生活では、頼まなくても自分を心地良い整った状態してほしいと願い、生活の中に心満たされる瞬間を望んでいる、であった。また看護師は、慢性呼吸器疾患患者の家族は、患者の弱っていく姿や苦痛をただ見ていることが苦痛であり患者への関わり方がわかり最大限患者に何かをしてあげたく、死を受け入れることへの準備が手当てされることをニーズとして捉えていた。患者と家族両者の関係に関わるものとして、患者と家族の間の互いの考えのずれが解消されることを患者家族は潜在的に求めていることを看護師は捉えていた。

在宅酸素療法を提供する事業所に勤務する看護師が捉えているニーズには、在宅で過ごす患者のケアの不足・サービスの不足を捉えていた。

研究１の結果から、ここで明らかになったニーズとして、看護師は、生活の中に心満たされる瞬間を患者の潜在的なニーズとして認識していることが明らかになった。また、患者と家族間でも互いの意思疎通が十分に果たされぬままにおり、それらの解消を潜在的なニーズとして捉えていた。これらはあくまでも看護師が捉えているニーズであるが、今後の見通しの不明確な日々を身体的状態悪化も体験しながら過ごす患者には自己のニーズを的確に表明することは難しく、それらを潜在的なニーズとして看護師は捉えていることが分かった。

（3）研究２の結果

看護師が患者・家族と結んでいる相互作用を以下に示す。

１）患者との相互作用には、「看護師が患者を受け入れて、そして患者が看護師を受け入れてくれる関係づくり」、「ささいなニーズをとらえるため、冗談や雑談などその場にあわせた会話を交わし、互いに開かれた関係をづくり」、「長い経過の中で日々をどうくらしたいかの細かなニーズをつかまえながら、それらを先回りし提供し、患者の無駄な心の動きを減らし日々の平静を保証する」、「患者の苦しい状況に逃げず存在し、患者を孤立させず、何か与える」、「患者の最後の時間に関わる看護師は、患者自身も表明しづらい患者の最後の最後にありたい姿が見いだせるように、信頼を獲得しながら、日々の些細な変化から看護師が感じる疑問をぶつけ引き出していく」、「患者の最後の最後にありたい姿に向かって、患者自身が不可能と捉えていることがらに可能であることをぶつけながら、できる方法を共にさぐり、苦しみは最小限にする技術を駆使しながら、家族も巻き込んで成就させる」を行っていた。

２）家族との相互作用には、「変化していく家族の望み・希望を聞き、どうしていけるか共に考え伴走する」、「家族が行っているケアを捉えて、認め感謝の言葉をかけ、周辺に知らせ、行っているケアの意義を家族の中に位置づけていく」、「患者の家族が、臨終に近付く中でも手だしできるように先を見越して情報を与え家族ケアの意義を伝え家族が関

われるようにしていく」を行っていた。

３）患者や家族あるいは重要他者を含むダイナミクスに対しては、「家族だけに限らず最後の患者を取り巻く重要他者とのパイプ役となり、患者および家族それぞれの臨終までの役割・存在を成就させる」を行っていた。

以上の結果より、看護師の慢性呼吸器疾患患者およびその家族とどのように相互作用を生じさせていたのか明らかとなった。そして、これらは看護師が一方的に提供したケアとは違って、患者－看護師、家族－看護師の相互の関わりの結果であり、それらは終末期になって分からなくなっている患者の最後の最後にありたい姿を引き出しつつ可能性を見極め成就させていく実践であると言える。

研究１および２より、看護師が行っている相互作用は、患者の潜在的なニーズを捉え、患者の最後の最後にありたい姿に向かってそれら潜在的ニーズを引き出し可能にさせていく実践であるといえる。

今後これらの結果を踏まえ相互作用の実践評価やケア実践モデルを行い、実践の場に用いられていくことが望まれる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計１件）

Yoshiyuki T：Nurses’perspective on the needs of chronic respiratory patients and their families at the end-of-life, 15th East Asian Forum of Nursing Scholars,2012,Singapole.（2012 年 2 月 24 日発表）

６．研究組織

(1)研究代表者

高橋　良幸

(TAKAHASHI　YOSHIYUKI)

千葉大学・大学院看護学研究科・助教

研究者番号：３０４００８１５

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし